



夏場は日差しがきついし、ここんところ梅雨がびっしり続いていてサボりがちだが、歩くのは好きだ。目的地まで1.3 kmとあれば、「あ、歩けるわ」と思ってしまう。20分を超えるとウォーキング目的になってしまうが、15分くらいなら苦にならないし、旅行先なら立ち止まって足元の花も写せるし、こんなところにこんなもんが！と小さな発見もある。

『ニッポン線路つたい歩き』は、全国北海道から九州までのいくつかの線路の、複数駅間を線路に沿って歩くだけのエッセイである。道は線路に沿って続くとは限らず、どんどん離れてしまったり、狭い国道のトンネルをトラックに怯えながら通り抜けたり。線路が見えている間はともかく、離れた道を右に左に折れていると、方向を見失って、どっちを向いて歩いているのかわからなくなる。寂れた地方の町の昭和の香りの食堂で、昭和メニューのラーメンやチキンライスを食べ、ひなびた昭和の銭湯に浸かって、足の疲れを癒す。

佐世保線のつたい歩きも面白い。そもそも佐賀県って何があるん？佐賀県武雄温泉共同温泉新館の建物は、なんと東京駅を設計した辰野金吾！だそうだ。

指宿枕崎線で新品の靴で靴擦れして真っ赤になって「歩くって繊細な運動なんだな」まあ、なんといっても靴はいちばん大事です。私もこの前の旅でちょっと古びてはいるけど、歩き慣れたスニーカーを履いて行った。パラパラ小雨のガーデンの中を歩き回ったら、靴の中に雨がしみてきてグッチュグチュ。これは靴の表面から雨がしみ込んだというより、足底の隙間？穴からじわじわと雨が入ってきた感じで気持ち悪いったらない。防水ゴアテックスのシューズも持っているんだけど、どうしても足親指が当たって痛くて履けない。

私世代の人の半数くらいは歩くことに支障を感じている。友だち3人でよく近場の鉄道

会社主催のウォーキング（13 kmほど）行事に行っていたが、そのうち1人が膝が痛くてもう長距離は歩けなくなった。腰痛で歩けない人も少なくない。そもそも、歩くことが苦手で、歩かない人も多いけど。

「鹿児島本線の窓から3時間歩いた道が電車ではあつという間。でも、つたい歩くと、列車にも線路にも深い親しみを感じてくる」

同じ景色でも、乗り物で通りすぎるのと歩くのとでは、圧倒的に記憶に差ができる。車1時間と徒歩1時間でも異なる。一步一步、自分の足が進むごとに、何かしらの物質が足裏から脳に伝わって、それが記憶の壁に折りたたまれていく感じがする。十歩ごとに屈みこんで足元の小さな花をカメラで捉えたりすれば、さらにデジカメのSDカードにも負けないくらいの情報が蓄積される…わけないけど、そのときの思いや、感動の具合はカードには残らない。

レトロ感満載の駅前の、営業しているのかやってないのかわからんような地方食堂、今にも崩れてきそうな字も定かでない看板などもカメラに収めるのは面白いね。しかし、このエッセイ、読むのは楽しいが、実際に自分でこんなつたい歩きしたいとは思わない。はっきり言って、何が面白い？同じ歩くなら名所旧跡を巡り、風光明媚な景色を眺め、自然豊かな森の中を歩きたい。同じ食べるなら昭和食堂より、名物（に美味しいものはなくとも）か、その地方しか味わえない珍しいもの、いわゆるグルメらしきものを食したい。ってホントに私も陳腐な旅行者です。

都会に近い南武線や徳島鳴門線で徳島うどん賞味。八戸線の種差天然芝地は線路に沿った道の海際にゴルフ場のような芝生が広がって、海には岩礁が連なっているそうだ。「駅で買った小さなわっぱ飯が…ウニもイクラもカニもメカブも、もれなく駅弁と思えないくらいウマイ」旅心がそそられる。八戸には降り立ったことがないので、行ってみたい。

『ニッポン線路つたい歩き』

久住昌之 カンゼン